

令和7年度(2025年度)

肥後っ子いきいき読書環境づくり事業講座

# 「児童資料の選書に対する議論と 子どもたちの読書環境」



- 主催** 熊本県立図書館
- 期日** 令和8年(2026年)2月2日(月)  
午後1時30分～午後4時まで
- 会場** 熊本県立図書館 3階大研修室
- 講師** 片山 心み 氏 (聖徳大学 准教授)
- 参加者** 48人
- 対象** 公共図書館職員、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援  
学校図書館職員(司書・司書教諭を含む)、学校図書館支援センター  
職員等学校図書館支援担当者など

## 講演「児童資料の選書に対する議論と子どもたちの読書環境」

前半の講話では、子どもの手に児童書が届くまでには出版や読み聞かせ、図書館の選書など必ず大人が関わり、その価値観が読書環境を形づくっているということについて話されました。子どもと大人の間だけでなく、大人同士でも立場の違いによって価値観にずれがあり、それが児童書の扱いに少なからず影響するようです。出版業界の状況としては、本全体の売上は減少傾向ではあるものの児童書は比較的堅調で、決して悪い状況ではないということ。一般書とは違って約8割がロングセラーの既刊本、その中の約4割を絵本が占めていることが紹介されました。また、「公共図書館」とは、憲法の保障する「表現の自由」すなわち「知る自由」を保証するために存在し、「図書館の自由に関する宣言」に基づいて選書方針や選書基準が作られていると話されました。児童書の選書には良書を厳選する考え方と、子どもの主体的な選択を重視する考え方があり、どちらかに偏らずバランスをとることが子どもの読書環境を豊かにすることでのことでした。流行の本の扱いや検閲の問題も紹介され、行き過ぎた配慮は悪書追放的思想につながる可能性があると示唆されました。

後半は「昔話」を用いたワークショップがありました。「昔話」は口承文芸として語り継がれてきた民族の文化遺産であり、一定の型を持つため人生経験の少ない子どもに適していますが、家庭で語られる機会は減少しているようです。特徴としては、発端句や結句、一次元性・平面性・抽象性、数や言い回しの固定などがあります。また、現在では絵本の形で提供されることが多くなりましたが、本来は語られるものであるため、文字として読むだけでは本来の魅力を十分に味わうことはできない可能性があり、再話を選ぶ際にはその点を踏まえることが大切だと話されました。続いて『かちかちやま』を読み聞かせしていただき、再話者の意図も紹介しながら再話の比較や残酷性の差異について説明されました。

ワークショップでは、残酷性が指摘される『かちかちやま』と、グリム童話『子どもたちが屠殺ごっこをした話』を比較し、意見交換を行いました。多くの参加者は後者の方がより残酷であると感じており、その理由として、抽象性が低く描写が生々しいこと、結末が悲劇的であること、平面性が弱く現実味が強いことなどが挙げられました。このような資料の扱いは図書館ごとに判断が分かれますが、提供する意図を十分に説明できるようにしておくことが重要であると話されました。また、子どもが怖い話を好むのは将来の不安に備えるためであり、物語を通してそれを乗り越えるという見方があるとの話もされました。最後に、昔話の語り手が減っている現状に触れ、その継承を続けられるのは図書館員であるという思いを伝えられました。

## <講演の様子>



### 【講座で紹介された参考資料】

- ・『かちかちやま』おざわとしお/再話 赤羽末吉/画 福音館書店
- ・『かいかちやま』平田昭吾/文 井上智/画 ポプラ社
- ・『かちかちやま』(じぶんで読む日本むかし話2)鶴見正夫/文 長新太/画 偕成社
- ・『おはなしのろうそく 10』東京子ども図書館/著 東京子ども図書館
- ・『グリム<初版>を読む』グリム/著 吉原高志・吉原素子/編著 白水社
- ・『初版グリム童話集 1』グリム/著 吉原高志・吉原素子/訳 白水社
- ・『「図書館の自由に関する宣言 1979 年改訂」解説』(第 3 版)日本図書館協会図書館の自由委員会/編 日本図書館協会
- ・『学校図書館の検閲と選択』ヘンリー・ライヒマン/著 川崎佳代子・川崎良孝/訳 京都大学図書館情報学研究会
- ・『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』河井弘志/著 日本図書館協会

### 【参加者の感想(アンケートより一部抜粋)】

○大人の目線だけで選書することは、子供の読む範囲が狭まること。狭まることは、子供達の将来の考えや思考が狭まることにつながり怖いことだと改めて思いました。また、昔話については、怖さの幅が再話によって違うのは知っていましたが、怖さのランクはもっと多いのだと初めて知り、驚きました。ありがとうございました。(公共図書館)

○普段選書しているものの、子どもの元に届く本は何段階もの読書に関わる大人の意識によって決まるということがとても興味深かったです。図書室としての役割をふまえた選書の大事さを再確認できた講座でした。(小学校)

○まさに日頃から悩んでいました選書に関する内容で、私自身は勤め始めた頃は、児童が好きな本を読むことがよしと強く思っていました。小学校図書館の役割も考えるに至り、どちらかという大人が良書と考える本を選ぶことに比重が向き始めていると感じます。子どもの知る権利を守ることも大事、教育としての読書活動も大事、どちらの視点も大事にしながらこれまで通り悩み悩み選書をしようと感じました。今回の講座はとてもわかりやすく楽しかったです。(小学校)

○選書の定義や意義、「良書」に関する価値観の違いについてなど、大変興味深いお話ばかりでした。また、昔話の残酷性について、深掘りする事ができ、今後、資料を収集する際の参考になりました。(小学校)

○選書の際に良書を増やしてくださいという要望があったのですが、良書とはどのようなものか曖昧だったので、今回の講座がとても参考になりました。(小学校)

○選書の基本的考え方等、興味深く聞かせていただきました。読み継がれている本の良さも理解しつつ、ステッピングストーン的な本にも触れさせたい思いもあったので、今後はそれらのバランスを取りながら偏りのない選書を心がけようと思いました。昔話のワークショップも内容の衝撃度合いなど、とても刺激になりました。再話者ごとに読み比べてみるのもおもしろそうだと感じました。(小学校)

○公共図書館でも学校図書館でも、児童資料の選書は、子供の視野が狭まらないようにしなければいけないということを、改めて感じました。今後の選書に生かしたいです。(小学校)

○選書と検閲の問題は本人の考え次第で違いがでてきて、どれが正解と言うものではないのだと思いました。例えばクレームがきたときでも、ちゃんと信念をもっての対応ができるよう心掛けていこうと思います。(中学校)

○自分の信条、スタンスはリベラルなのに、職業的には良書厳選主義である自覚がありました。今回の講座でそのモヤモヤが、先行研究や片山先生の研究等を通し理解することができました。子どもが「権利主体」である。知的自由をもっている。この事を改めて胸に刻み、選書したいと思います。(中学校)

○児童書の選書については、昨今研修を受ける機会がなかったので、新鮮な気持ちで受けられて良かったです。特に自校の収集方針を懸案中でしたので、いくつか参考になるお話を聴くことができました。(特別支援学校)